2013 年度 URP 特別研究員（若手）合評会　梗概

2014.3.11 中村光江

廻り神楽の調査状況と今後の課題について

＜はじめに＞

研究テーマ『芸能の力―被災地岩手の廻り神楽を巡る考察』では、岩手県に今も伝わる「廻り神楽」の習俗の震災後の状況を追いながら、この習俗を成立させているもっとも重要な要素は広義の宗教（信仰心）であり、儀礼芸能の力は演者を含むコミュニティやそこに住まう人の精神への多様な働きかけがあるというところから考察している。

陸中沿岸部には現在、鵜鳥神楽（普代村）と黒森神楽（宮古市）の二つの廻り神楽が残っている。いずれも正月明けに神社で「舞立ち」の儀礼を行い、権現様と呼ばれる獅子頭に地域の産土や氏神の霊を移して携え、３月中旬頃まで岩手県陸中沿岸部の北は久慈市、南は釜石までの村々を南廻りと北廻りに１年ごとに交代して廻村してきた。廻村先では家々で獅子頭をまわして「門打ち」と呼ばれる悪魔祓いと祈祷の儀礼を行い、夜は「宿」と呼ばれる特定の民家や公民館で長時間にわたり神楽を演じる。神楽の内容は記紀神話に基づいたものや、地域の現業に関わる神々の舞などである。

＜調査・研究の概要＞

東日本大震災の津波被害により多くの「宿」が消失したため、どちらの神楽も巡行先が激減している状況にある。昨年度は震災後のこれらの神楽巡行の状況と周囲のその他の祭礼の状況を VTR に収録しながら採集した。今年度は、諸般の事情により現地には数回しか行けなかったが、信仰心の基層となる黒森神社祭礼時の湯立神事と神子託宣の調査（７月）と現在の神子へのインタビュー、北廻り巡行における旧別当家の墓念仏、山口地域の家々への門打ちおよび旧別当家のインタビューなどを通じて、地域の信仰の古層に関する調査を行った。

＜今後の課題＞

近世期から伝わる廻り神楽の習俗や地域の信仰については、歴史学的、民俗学的に精緻な調査研究がすでに行われており、15 年～20 年前の状況までは追うことができる報告書や研究書もある。次年度は黒森神楽の震災直前～震災後の巡行状況、内容等を改めて調査・整理するとともに、神社や演者、コミュニティの人々へのメンタルな側面も含めたインタビューを行っていきたいと考えている。それらを先の報告書や研究書と比較しながら、宗教人類学的手法で儀礼芸能の力について理論的、科学的な解釈を進めたい。